



Profile 林東植（イム・トンシク）さん
昭和12年、大阪府で生まれる。10歳でハンセン病を発病。20歳で国立ハンセン病療養所「長島愛生園」に収容。収容2カ月後、眼球注射により失明。睡眠薬自殺を図るも未遂。平成14年、社会復帰。その後図書館でボランティアの口述筆記により執筆活動を開始。両手足にまひの後遺症が残るが、現在広島市内で一人暮らしの生活を営んでいる。

メッセージ

—Message 伝えたいことがある—

今、伝えたいことがある、
今、伝えなければならぬことがある。
誰かが、誰かを否定していい理由なんて
どこにもありません。
互いの違いを認め合い、
人と人が思い合う心を持てば、
差別や偏見、いじめや戦争といった悲しい出来事は、
必ず、この世からなくなるはず——。

—特集 メッセージ— 13ページまで—

1 メッセージ —伝えたいことがある—

ハンセン病元患者
イム・トンシク
林 東植さん
(広島市・77歳)

日本で生まれた林さんは、10歳でハンセン病を発病。光を奪われ、人生のほとんどを療養所で過ごした。

「ハンセン病は、過去のことではありません。闘いは、今も続いています」

7月9日、さくらびあで行われた人権講演で林さんは、静かにそう切り出した。

私は、人権を語る言葉は持っていません

自分の経験を

皆さんで

判断してほしい——

10歳で発病した 林さんからのメッセージ

「ハンセン病は過去のことではありません。ひどい人権侵害が行われてきた歴史があります。しかし、私は人権を語る言葉を持っていません。ただ自分の経験を語るのみ。あとは皆さんで判断してほしい。」

7月9日さくらびあ小ホール

で行われた市と広島県西部人権問題啓発活動推進者の会主催の人権講演会。講師の林東植さんは、静かにそう切り出した。

昭和12年、在日朝鮮人2世として大阪で生まれた林さん。戦争が激化した昭和19年、一家は安佐北区に疎開。10歳のとき、左腕内側が何も感じなくなった。「つねっつも痛くなかったんです」。ローソクの火を当てた

が何も感じず、何度も試したため今でもやけどの跡が残る。そこで初めてハンセン病を発病したことが判明した。

ハンセン病。私たちはこの病気のことをどれだけ知っているだろうか。

ハンセン病は、「らい菌」に感染することで起こる病気で、以前は「らい病」と呼ばれた。末梢神経がまひしたり、皮膚がた

だれるような症状があり、病気が進行すると容姿や手足が変形する。昔は不治の病と考えられていた。

「らい菌」は明治6年、ノルウェーのハンセン医師によって発見。らい菌は、極めて感染力が弱く、うつりにくい病気だ。戦前戦後の栄養・衛生状態の悪い状況下では、発病する人もいたが、昭和18年に治療薬が開発されて以降は、完治する病気となった。

差別と偏見を生んだ 国策による強制隔離政策

明治40年「癩予防二関スル件」が制定され、各地の患者の収容が始まった。この法律は、昭和6年成立の「癩予防法」へと引き継がれ、国立の療養所が各地に建設された。

発病した人は国の隔離政策によって、いや応なく療養所に閉じ込められた。また、県内かららい患者を探し出して強制隔離する「無らい県運動」が全国的に展開され、子どもだろうと容赦なく親元から引き離された。

何より、その療養所の退所規定が設けられなかったこと、職員や医師が警察官を伴って患者のもとを訪れたこと、患者の自宅は徹底的に消毒されたことな

だから、「死んでも家には帰してもらえない、手錠をかけてでも連れて行かれる病気」として人々に認識された。

こうした光景を目の当たりにした人々の心に「ハンセン病は恐ろしい」というイメージが定着し、それが偏見や差別を助長させていった。また、「この病気が遺伝する」と間違った認識から、患者は収容所内で結婚はできても、子どもを産むことは許されなかった。

そんな中、世界中でハンセン病に対する隔離政策を止め、患者と家族の権利を守るべきだという声が高まっていったが、日本はその流れに逆行。昭和28年に「らい予防法」を改正し、強制隔離政策を続けた。

「自分がいかに病にかかったことよりも、母の悔しさを思うと涙が止まりませんでした」と林さんは当時のことを振り返る。

19歳のときには、病状も人目に分かるくらいひどくなり、仕事にも就けず、生活も荒れていった。そして昭和32年、林さん20歳のとき、国立ハンセン病療養所「長島愛生園」に収容された。それは、WHOが日本政府に対して、ハンセン病は強制隔離する必要はないと勧告した翌年のことだった。